夢の彼方の魔法陣

元素猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢の彼方の魔法陣

【Ｎコード】
Ｎ９５９９Ｘ

【作者名】
元素猫

【あらすじ】
魔導士養成所の三年生イーリーは、卒業試験に『ドラゴン狩りの手伝い』を依頼されてしまう。途方にくれた彼は、とりあえずレポートを書くために最強の闇の魔導師アイソリュースが残した蔵書を見せてもらえることになり・・・。

プロローグ

名前を呼ばれ振り向いた瞬間、彼の幅広剣が深く突き刺さった。彼女は、何が起きたのかわからず、彼の顔を見つめる。穏やかで優しいその顔には、微塵の迷いもない。

噂は本当だったのだと、その時彼女は気付いた。到底、相容れることなど出来ない存在だったのだとわかっていたが、終わりはあまりに突然で、あっけない。

自分は何だったのだろうか。何のために、戦ったのだろうか。

すべてが、無意味に思えた。

涙が溢れたが、それが彼の心を動かすことはない。彼には野望がある。その野望を成就させるためなら、何であっても払いのけるだろう。そう、自分も払いのけられたのだと、彼女は思った。

「人心を惑わす不逞(ふてい)の輩よ。この地に眠るがいい」

「あなたは私の屍骸の上に、何を築くというの」

「法を築く。それが、この国の礎となる」

「血塗られた法に、人の心は縛られない」

「光が強く輝けば、闇はそれに打ち消され薄くなる。やがて、時がすべてを忘れさせるだろう」

彼は、突き刺した剣を真上に斬り上げた。彼女の肉体は、無残に裂かれ、闇の空を血に染めた。

「魔女は死んだ！　我らは勝利したのだ！」

勝ちどきの声をあげる。

彼は彼女の屍を一瞥し、歩き出した。彼にはまだ、最後の仕事が残っているのだ。

プロローグ（後書き）

１０年ほど前に、自分が初めてちゃんと書いたファンタジーです。すでに完結した作品なので、多少の見直しをしつつ更新したいと思います。

第一章　一話

すべての光が失われたような暗闇の中で、イーリー・シュレイガーはひとり思考を巡らせていた。理論は完璧である。手順さえ間違えなければ、失敗することはない。そう自分に言い聞かせて、彼は時が来るのを待った。

ほんのわずかな時間なのだろうが、彼にはとても長く感じられた。まるで死に直面したかのように、これまでの人生が走馬灯のように蘇る。

病に倒れ、道端で手の施しようもなく息を引き取った母の姿が、深い悲しみとともに無力な自分の心を締め付けた。あの時、強い人間になろうと誓ったのだ。

この難関を突破しなければ、あの時の誓いも、これまでの努力も無駄になってしまう。

イーリーは、頭を振って弱気な自分を追い払った。

……胸を張りなさい。

恥じるようにうつむく彼に、母がよく言い聞かせた言葉だった。

イーリーは胸を張った。戦うべき相手は、いつも自分の内にあるのだ。

緊張のためだろうか。気が付くと、わずかに魔導書を持った右手が汗ばんでいた。イーリーは魔導書を左手に持ち替えると、着ていたローブで汗を拭い、冷えた空気を鼻から吸い込んだ。そしてゆっくりと口から吐き出し、それを数回繰り返して、気持ちを落ち着かせた。

やがて一つの、炎のような明かりが灯る。明かりはイーリーを中心とした正方形を描くように、ぜんぶで四つ灯って暗闇を照らした。ぼんやりとした光の中に浮かび上がった彼の姿は、十四、五歳の、まだあどけなさを残す少年であった。

黒髪は闇に溶け、わずかに茶色味を帯びた瞳には、橙色の明かり

が揺れている。
ハイデル王国が魔導士協会と協力して設立した、養成所の三年生生徒というのが彼の立場であった。
ハイデル王国は、建国の英雄である初代国王ゼーマン・ハイデルが、勇敢な騎士であると同時に、強力な魔導士であったところから、騎士だけではなく魔導士の育成にも力を注いでいた。
この養成所を卒業した者だけが魔導士を名乗れるため、世界中から多くの若者が入学して来ているのだ。イーリーも、その一人だった。
「それではこれより、魔法課程の修了試験を開始する。生徒イーリー・シュレイガー君、始めなさい」
「はい」
直接、頭の中に語りかけるような声に応え、イーリーは魔導書を右手の掌に乗せ、挟むように左手を添えた。
この試験では、課題となる四元素――地、水、火、風――の魔法のうちから、最も得意なものをひとつ披露しなければならない。その際、補助として魔力を増幅する道具をひとつだけ持ち込むことが許されていたのだ。多くの呪文で紙面を埋めた魔導書は、それ自体が魔力をわずかながら帯びていた。
「定義（ヴァース）！」
イーリーの声に呼応して、魔導書に添えた左手が燐光のような光を放った。
魔法の基本は、代価による契約である。
元素界の住人と契約し、魔力を報酬として払う代わりに、その力を借りるという契約の流れを儀式化したのが魔法なのだ。多くの魔力を消費するほど、強力な住人の力を借りられるのであった。
儀式はまず、住人がこの世界で力を揮（ふる）えるようにするため、仮の体を用意しなければならない。この仮の体を『素態（そたい）』と呼び、魔力を練成して造る。練成した魔力は、そのままではすぐに散ってしまうので、一度媒介に留め置くことが必要だった。イーリーの場合は、

光る左手が媒介になっていた。
媒介に自分の体の一部を使うのはごく一般的であり、初歩的なものであった。素態を別の物質に伝達させる必要がなく、力を利用する時の感覚が掴みやすいのである。
魔法の扱いは、体系化された理論と経験による感覚が必要なのだった。
「召喚（クリート）！」
媒介の左手が熱を帯びたように赤くなり、蛍の光のような速さで明滅を繰り返し始めた。元素界との間に道が開かれ、用意した素態に見合う住人が移動を始めているのだ。
これがもっと熟練した魔導士ならば、経験とより高度な理論を用いることで、一連の作業を簡略化し、時間の短縮を図ることが出来る。そして、時には一瞬で力を行使するのだ。
やがてイーリーの左手が炎に包まれた。どうやら、火の住人を呼び出したようである。
素態に入った元素界の住人は、その能力に応じてこちらの世界で最も適した姿になるのだ。そして、
「闇を切り裂け、炎よ！」
イーリーはそう叫んで、炎に包まれた左手を突き出した。炎は渦巻き、闇の中を跳ね回って彼の頭の上に着地した。その姿は、とても可愛らしい、
「にゃあ！」
猫だった。

試験を終えたイーリーは、紺のブレザーにズボンという養成所の制服に着替え更衣室を出た。すると、
「やあ、試験はどうだったかな？」
満面の笑みで近付いて来たのは、入学してからずっと学年トップの成績を維持し続けている、レンツ・ファラディであった。

イーリーは彼を睨み付け、何も言わずに歩き出す。
試験の様子は黒水晶によって映し出され、誰でも見ることが出来るのだ。案の定、レンツはこんなことを言い出した。
「僕が小さい頃、お父様が『砂漠の貴婦人』と呼ばれるスフィルティアを、誕生日に贈ってくれたことがあるんだ。僕に懐いていたんだけれど、魔導士になるため王都へやって来てから、ほとんど会うことが出来ないんだ。代わりと言うと言葉は悪いが、ぜひ君にお願いしたいと思っているんだよ。君の不思議な能力で、僕の寂しい心を癒してくれないだろうか？　ああ、ちなみにスフィルティアというのは猫の種類のことでね……」
きっと、試験に合格していなければ、イーリーは彼を殴っていただろう。
試験の合否は、扱う魔力の大きさによって決まるのだ。もしあの時、現れたのがネズミであったら不合格だった。しかし、魔導書を使ってあのレベルでは、合格といっても笑われて仕方がない。
自分でそのことがわかっているだけに、レンツに言い返すことが出来なかった。
入学してからずっと、イーリーは下から数えた方が早いくらいの成績である。そんな彼に常に上位のレンツが突っかかってくるのは、ある理由があった。
魔導士は魔法の他に、調合も行う。強力な魔力を持った者は各国に召し抱えられるが、それ以外の者は魔導士協会に寄せられた依頼を受けたり、魔具という魔法補助の道具や薬――病気の治療に使うものはもちろん、毒や実験の材料――を作って販売するなどして生計を立てるのだった。
イーリーは、母が病に倒れたときに魔導士になることを決意した。その時から彼の目指すものは、国に仕えることではなく、在野で病と闘うことにあったのだ。そのため調合の授業は、彼にとってもっとも重要視すべきことだったのである。
もともと、記憶力は抜群に良い。魔法も筆記テストでは上位にラ

ンクインするが、才能に左右される実技がどうしても苦手であった。結果、総合では平凡な成績になってしまうのである。

レンツはそんなイーリーに、唯一、調合では勝てなかった。調合の筆記も実技も、イーリーは完璧だったのだ。それが、レンツのプライドを傷つけたのである。仮にイーリーが魔法も優秀であったなら、レンツもそれほどこだわることはなかったのかも知れない。

そんな理由から、レンツはイーリーの顔を見れば、何かひとつ皮肉を口にした。もしストレスが魔力に変換できたなら、イーリーはハイデル王国宮廷大魔導師のチャンドラーに匹敵する魔導士になっていたことだろう。

第一章　二話

機嫌よく口を滑らかに語るレンツに後をつけられながら、イーリーは受付に向かっていた。

魔法課程の試験は合格したが、それは単に卒業試験を受ける資格を得たに過ぎない。これを合格しなければ卒業は出来ず、魔導士にもなれないのである。

この養成所には留年はなく、卒業できなければ退学なのだ。もう一度魔導士を目指す場合は、再び一年から勉強をしなければならない。厳しいようだが、わずかな入学金を支払えばその後は一切費用が掛からないばかりか、毎月わずかではあるが小遣いまでもらえるシステムなので、能力がないと判断された生徒を残しておく余裕はなかった。それでも広く門戸を開けているのは、貧富の差が魔導士としての資質に関わりがないためであり、同時に、それだけの需要があるということでもあった。

受付に到着したイーリーは、数人の列に並んで順番を待った。その間も、すぐ後ろでレンツが顔に掛かる金髪を払い除けながら、饒舌（じょうぜつ）になっていた。大半がファラディ家の自慢であり、すでに何度も聞かされた話ばかりである。

レンツがこうしてイーリーに自慢話をするのは、周囲の生徒たちにとっても見慣れた光景だったようで、気にする者はない。仮に気になったとしても、あれこれ口を挟むことはないだろう。誰も、自分がイーリーに立場になることを望んではいない。

やがてイーリーに順番が回り、窓口に受験票を差し出した。卒業試験の課題は、例年通りレポートの提出とEランクの仕事をこなすことだった。

Eランクは、魔導士協会の依頼の中でもっとも簡単とされ、報酬もごくわずかなものである。

「えっと、じゃあこの封筒からひとつ選んでください。中に依頼内

容が書かれています。同封の依頼完了証明書にサインをもらって、レポートと一緒に提出していただきます。期間は本日より一ヶ月間です。ちょうど、シュタルク王の即位十周年記念式典の翌日までとなるので、忘れないようにお願いします。何か質問は？」
「いいえ、ありません」
「じゃあ、がんばってください」
封筒を受け取ってその場を去ろうとした時、イーリーは受付の人に呼び止められた。
「君はイーリー君だよね？」
「はい、そうですが」
「言い忘れましたが、君はこの試験で不合格だった場合、退学となります」
「はい」
「それで、その後の再入学も許可されませんので、そのつもりでいてください」
「えっ？　それってどういう……」
「つまりだね、君は二度と魔導士にはなれないということだよ」
嬉しそうに、横からレンツが口を挟んだ。
「君のあの成績では、仕方がないところだろうね。唯一、人並みな調合の知識を生かして、医者にでもなったらどうだい？　ああ、でも医者になるにはお金がかかる。君には無理か」
なおも喋り続けるレンツの横で、受付の人が言った。
「魔導士に求められるのは総合的な能力です。特に求められるのは、やはり魔法の力なわけです。魔法の力は努力だけではどうすることも出来ないことを、十分に理解されていると思います」
うなだれるしかなかった。つまり、これ以上は見込みがないということなのだ。
イーリーはくちびるを噛んだ。悔しかったが、まだダメだと決まったわけではない。今回の試験に合格すれば良いのだ。
受付ホールの端に移動した彼は、恐る恐る封筒を開けた。レポー

トなら自信がある。簡単な依頼であるようにと願い、内容を確認した。
「ドラゴン狩りの手伝い……」
イーリーは言葉を失った。
世界で最も巨大で凶暴と言われるドラゴンに挑み、どれほどの戦士が命を落としたことだろう。たとえ手伝いとはいえ、とてもEランクの仕事とは思えない。
……ボクをどうしても退学にさせたいのだろうか？
一瞬、イーリーはそう思ったがすぐに打ち消した。封筒は自分で選んだのだ。きっと何かの手違いがあったのかも知れない。
彼は封筒を持って、受付に戻ろうとした。するとそこへ、レンツが寄って来たのである。
「崖っぷちの君は、どんな依頼を受けたのかな？　ちなみに僕は、空き家に住み着いた怪しい一団の調査、というつまらない仕事だったけれどね」
「ボクのは手違いみたいだ」
「ん？」
レンツは首を傾げ、イーリーの封筒を奪うと依頼書を読んだ。
「何するんだ！」
「……ドラゴン？」
「そうだよ。これはEランクの仕事じゃない。だから交換してもらうんだ。さあ、返してくれ」
レンツはしばらく考え、奪い取った封筒をイーリーに返した。
「これは、君にとって千載一遇のチャンスと言えるだろうね」
「えっ？」
「いいかい、魔導士になれたとしても、君の腕では雇う国はないだろう。だとすれば、個人で依頼をこなすか、どこかに就職するしかあるまい。だが、いずれにせよ、今の成績ではどれも難しいと言わざるを得ない」
「……」

「だからといって、新しく自分の店を開く資金もないだろう。つまり、せっかく魔導士になれたとしても、その能力を生かすことは出来ないということさ」
「そんなことわからないだろ」
「いいや、わかるさ。毎年、数百人もの卒業生がいるんだ。いくら需要があるとはいえ、誰でもいいというわけじゃない。事実、過去の卒業生の中で魔導士以外の仕事を見つけた者は半数近い。つまり、優秀な人材だけが、その後の成功を約束されているというわけだよ。今の君は、絶望的だろうな」
イーリーは、顔をしかめた。彼にも心当たりがあったのだ。
魔導士になるべく村を出て行った若者が、卒業して実家に戻り、農業を継いだことがあった。せっかく魔導士になれたのにと幼い彼は思ったが、今考えればレンツの言う通りなのかも知れなかった。
「しかし、だからこそこの依頼は、チャンスなんだ」
「どういうことだよ？」
「学校の成績よりも、実績を重視する人間もいるということさ。手伝いとはいえ、ドラゴン退治に参加することは、君のお粗末な成績を打ち消すだけの甘い響きがある」
レンツはニッと笑って、イーリーの耳元で囁いた。
「手伝いと言っても、後方支援かもしれない。それに、実際に行ってみてあまりに危険な依頼なら、断ったとしても問題にはならないさ」
その言葉に、イーリーの心は揺れた。
薬を作って病人を救うとしても、やはりどこかに就職しなければならないだろう。路頭で配った薬を飲む奇特な者はいまい。
三年間努力をしたのは、肩書きが欲しいからではなかった。
イーリーは封筒を胸に抱え、小さくうなずいた。とりあえず行って、依頼主から話しだけでも聞いてみよう、彼はそう考えた。
「お互い、かんばろうじゃないか」
レンツはそう言い、イーリーの肩を軽く叩くと、颯爽と去って行

った。そのうしろ姿を、複雑な気持ちで見送ったイーリーは、風に消えるほど小さな声で呟いた。

「感謝、すべきなのかな……」

けれど、それでレンツに対する気持ちが軟化したわけではない。素直に喜べない、それが感想だった。

第一章　三話

養成所を出たイーリーは、寮には戻らず公園に向かっていた。あまり人がいない場所で、ゆっくりと考えたかったからだ。

王都にある公園は、作られた時の予想に反して、あまり国民の憩いの場とはならなかった。その理由はただひとつ、作られた場所にある。

ハイデル王国の王都は、巨大な湖と岩壁に挟まれた場所に、東西南北に沿って造られていた。まず、北側にある湖を背にして王城が建ち、そこから真っ直ぐ南に、街を貫くように大通りが延びている。突き当たりには岩壁がそびえ、その麓に植林して公園を作ったのだ。

また、西側には王都への入口になる正門があり、それ以外は高い壁によって囲まれている。正門から真っ直ぐ東へ続く道の先は、歴代の王の名が刻まれた石碑があり、国内外から観光に訪れる者も多い。どちらかといえば、この場所の方が憩いの場として利用されるようだ。

ところで、公園の場所の何が問題なのか。それは、ハイデル王国に伝わる建国の伝説にまつわる噂にあった。

今より二千年以上も昔、まだ世界は暗く閉ざされ、闇の眷属によって支配されていた。多くの人々が無法の世を嘆き、苦しみと悲しみの声を上げる中、世界中で勇者が立ち上がっていた。この地に現れたのはゼーマンで、人々の先頭に立ち勇猛果敢に戦ったのだという。

ゼーマンはもともと、闇の魔導師で最強と言われた『魔女アイソリュース』を追いかけ旅をしていた。そしてこの地でようやく倒すことができ、転生して蘇ることがないようにと、魂を封印したのだという。その封印の地こそが、公園の真下だったというのだ。

根拠は、ゼーマンの死後に発見された、一冊の本にあった。

『対比力学』と題されたこの本の著者が、ゼーマン本人だったの

である。ただし、発見された時はただ紐で閉じられた原稿だったのを、後に製本して仕上げた際に、一行目に書かれた文字をタイトルにしたのだ。

この本によると、闇の力を抑えるために、無理に光で押し進めることは逆効果であると書かれている。つまり、強引な封印はいずれ破綻することを意味していた。これを回避する方法として、二つの力を対極に置き、バランスを図ることを提唱していたのだ。

これに当てはめて王都の位置関係を考えると、光の象徴である王家と均衡するのは、西の正門か南の公園ということになる。封印の地を正門とするのは考え難く、また、現在の王こそが国を支える光であると考えるならば、必然と公園が浮かび上がるのだ。

公園に近付くにつれ、人の姿はまばらになった。中に入ると街の音も遠く、誰もいない小道が木々を避けるように曲がりくねりながら、奥へと続いていた。

ほとんど手入れはされておらず、空を覆う枝葉は広がり放題で、見上げても空はほとんど見えない。それでも、意図的に間隔をあけた場所には隙間ができ、そこから日光が差し込んで、大地に突き刺さるように白くすじを作っていた。

薄暗くはなかったが、曇りガラス越しに眺めたような、ぼんやりとした光景だ。

イーリーは散策するようにしばらく歩き、途中のベンチに腰を降ろした。ベンチの上は落ち葉が積もり、払っても砂っぽく、やや湿った感じがする。

座るなり依頼書を取り出して内容を確認するが、何度見てもその文字が変わるわけではない。

「はあ……」

溜息をつき、イーリーは考えた。

依頼書に書かれている従事期間は七日間、依頼主のいる場所まで

馬車で一日ほどだろうか。
毎月もらえるわずかな小遣いを貯金しており、それを使えば往復馬車に乗れるだろう。だが、そのお金は卒業後の生活費のために貯金しているのである。使うとしても、それは今月分の小遣いだけだ。それなら、片道だけでも馬車を利用出来た。
「行きは歩きだな。それにおそらく、向こうに行ったらレポートを書く時間なんてないだろうから、先に済ませておくか」
問題はどんな内容で、どこでレポートを書くかだった。学校の図書室が一般的だろうが、出来ればレンツには会いたくなかった。きっと、用がなくとも顔を出すだろう。
イーリーは、持っていた依頼書を封筒の上に乗せ、両手を挙げて大きく伸びをした。気持ちよく、目を閉じたその時、突然強い風が吹き抜けた。
小さく声を上げたイーリーは、慌ててベンチを立つと手を伸ばす。しかし、指の隙間をすり抜けた依頼書は、ふわりと波打ちながら、滑るように地面に落ちた。
駆け寄って拾おうとした彼は、視界の端に人影を見つけた。覆面で顔を隠した、黒づくめの怪しい人物だ。はっきりとはわからなかったが、体のラインや肉付きから、おそらく男性だろうと推測出来た。
イーリーはとっさに身を屈め木の陰に隠れると、そっと様子を伺った。黒づくめの男は、何かを探すように視線をあちこちに向けている。
だが、どうやらこの近辺には目的のものはなかったらしく、男は公園の奥へと進んで行った。イーリーは一瞬迷ったが、封筒を上着の中に仕舞い、後を付けてみることにした。
危険な雰囲気を感じたが、強く興味を惹かれたのだ。以前、『東方国家の歴史と文化』という本で、似たような姿をした隠密部隊を見たことがあったためである。
……何を探しているんだ？

このまま奥に進んでも、あるのは行く手を遮る岩壁だけだ。実際に行ったことはなかったが、地図には特に何も書かれていなかったのを覚えている。

もっと近くで……そう思って移動しようとした時、落ち葉を踏みつける音が背後で鳴った。イーリーは驚いて振り向いたが、何もない。しかしそのせいで、イーリーは男に気付かれてしまったのだ。

舌打ちをした男は、懐からやじりのようなナイフを取り出すと、一直線に走ってきた。その足は速く、息を呑む間に距離は半分に縮まっていた。

イーリーは背を向けて逃げ出す。後悔したがすでに遅い。慌てていたので、自分がどこに向かっているのかもわからなかった。

ただ、出口へ、街の賑やかな方へ、そう思いながら走っていた。しかし、目前に現れたのは、木々よりも遥かに高い岩壁だったのである。

……どうしよう。

触っても、叩いても岩壁は消えない。男の姿は、すぐそこまで迫っている。

相手の実力は不明だが、少なくとも自分では勝てないだろうとイーリーは確信していた。あまりに情けないが、それを前提として考えなければならない。

イーリーはとにかく、今の状況を冷静に分析した。

この公園に訪れるものはほとんどなく、助けは当てに出来ない。だが逆に公園を抜けさえすれば、男も追っては来ないだろう。自分がすべきことは、とにかく逃げることだ。

頼れるのは、心もとない魔法のみである。男が養成所の制服を知っていれば、イーリーの姿を見て、多少は魔法が使えることを警戒するはずだ。成績まではわからないから、多少のハッタリとしては使える。

……今の位置関係を変えないと。

公園を出るなら、今の位置ではまずい。イーリーは、岩壁に沿っ

て走り出した。
最初は全力で走り、男が横に並んだらスピードをわずかに落とす。すると、男が自分よりも前に出て行く手を遮ろうとするはずだ。そうすれば、互いの位置関係が九十度回転したことになる。
イーリーはそう考えたが、男は悠長に追いかけっこをするつもりはないようだった。

第一章　四話

イーリーがどう動こうとも、男の目指す標的が変わるわけではない。最小の動きで距離を縮め、手の中に隠すように持った小型ナイフで切りつけてくる。木を盾にしながらかろうじて避けているが、それも徐々に限界がきていた。まず、彼の体力がもたない。普通に逃げるよりも、心身ともに疲労していた。

腐葉土に足を滑らせたり、木の根につまづくことも多くなる。そうした隙を、男は決して逃さず責めてくるのだ。最初は制服を切るだけの攻撃も、やがて皮膚に浅いながらも傷を残すようになった。血はほとんど出なかったが、逆にそれが痺れるような痛みとなってイーリーを襲う。

なんとか形勢逆転を狙おうと魔法を使うチャンスを窺うが、その隙が相手にはない。今のイーリーの能力では、どれほど急いでも三十秒は必要だった。『素態』の練成には、意識の集中も必要である。逃げつつ、攻撃も避けなければならない今の状況では、魔法を使うのは無理といえた。

……どこかに隠れられれば。

魔法でもたいした攻撃にはならない。だが、このまま逃げ回っているよりは、何かのきっかけになり得る可能性がある。時間を稼げる場所を、イーリーは視線を素早く走らせて探した。

祈るような気持ちだった。すると、それが通じたわけではないだろうが、岩壁に、錆付いて同化している鉄の扉を発見したのである。さらにその隣には、人工的に掘られたと思われる横穴が開いていたのだ。

鉄の扉は簡単に開きそうにない。だが、横穴もどこまで続いているのかわからない。どうすべきか、イーリーは迷った。その時である。

横穴から、十歳ほどの少女が飛び出して来たのだ。少女はイーリ

ーたちの姿に、驚いたようにその場で立ちすくんでしまった。それを見た男が舌打ちをし、イーリーは微かなその音を捉えて直感する。
「逃げるんだ！」
叫ぶと同時に、イーリーはあらん限りの力で大地を蹴った。前のめりになりながら少女を庇うように腕を回し、勢いのまま倒れて地面を滑る。
痛みに低くうめいたイーリーは、自分を見下ろす影に気付いた。男が、とどめを刺しにきたのだろうか……そう思い向けた視線の先には、先端が三又に分かれた槍を持ち、帷子（かたびら）の上から胴と両手足に鎧をまとった老騎士の姿があった。
「プリム、大丈夫か？」
どうやら、少女の知り合いのようだ。
老騎士は瞬時に視線をめぐらせ、状況を把握する。プリムという少女に覆いかぶさるように、一緒に倒れているイーリーの右の肩口には小さなナイフが突き刺さっていた。そのナイフを投げたのは、黒い覆面で顔を隠した男だ。よほど見当違いでもしない限り、プリムにとって誰が敵かは明白である。
「お前は、この国の者ではないな」
一歩を踏み出して少女とイーリーを背に、老騎士は槍を構えた。幾多の戦いを潜り抜けてきた猛者の気迫、それが老騎士の全身から立ち昇る。
男はわずかに怯み、老騎士はその隙を逃さず大地を蹴る。年齢や鎧の重さなど感じさせぬ身のこなしで、自分の間合いに敵を捉えて鋭く槍を突き出した。男が上半身をひねってかわすと、老騎士はすぐさま腕をねじり手前に引きながら横に薙（な）ぎ払った。
槍の三又の両側は下向きに鋭く伸び、外側も内側も鋭利な刃になっている。そのため、前後左右どの動きでも敵を討つことが出来た。
男の脇の下辺りを浅く裂いた老騎士の槍は、間髪いれず次の攻撃に転じる。しかし男も、いつまでも黙って受身でいるわけではない。何本ものナイフを投げ、老騎士の接近を牽制する。打ち合いこそ無

かったが、互いに間合いを計りつつ、見えないやり取りを繰り広げるその様子に、イーリーは圧倒されていた。
自分の下で少女が体を動かそうとしたことで我に返り、イーリーはすぐに起き上がって手を差し出す。
「大丈夫？」
彼が尋ねると、少女は少し警戒した様子で黙って頷く。言葉を交わすこともなく、二人は自然と老騎士の闘いに視線を向けていた。その時、イーリーは少女を守らなければという責任感が生まれ、わずかに前に出て少女を庇うような位置に立った。そして、誰にも気付かれないように意識の集中を始める。『素態』を練成し、いつでも魔法を使えるように準備しておこうと考えたのだ。
イーリーは男に見えぬように媒介となる左手を背後に隠し、『素態』を定着させた。左手が燐光を放ち、少女が息を呑むのがわかった。
善戦している老騎士の邪魔にはなりたくはない。イーリーはタイミングを待った。
男も老騎士も、イーリーの行動には気付くことはなく、互いに目前の敵を倒すことに集中している。どちらも一歩も引かず、静かな攻防を繰り返していた。だが、どれほど鍛えようとも持久力は無限ではない。同じレベルまで昇りつめた相手なら、最終的には年齢がわずかな差を生んでしまう。それは、老騎士の荒い呼吸によって現れた。
これまで乱れのなかった呼吸が荒くなり、彫りの深い顔に汗が滲(にじ)む。表情にも、焦りが浮かんでいた。
イーリーは息を潜め、出来る限り気配を消す。おそらく今の男の頭には、彼という存在は失せているか希薄だ。それはイーリーが男にとって手に余る相手ではないからだが、それを逆手に取ろうと考えたのである。チャンスは一回、それを逃せば真っ先に殺される可能性があった。
もし男が自分と少女を同時に攻撃したなら、老騎士が守るのは少

女だろう。イーリーにも、男にもそれは確かなことだった。
「あっ！」
わずかに意識が別のことに向いていたその時、少女が小さく声を上げた。老騎士の動きが鈍ったのを見逃さず、距離を縮めて槍の内側に男が入り込んだのだ。
少女が思わず飛び出そうとするのを押しとどめ、イーリーは素早く左手をかざした。
「召喚（クリート）！」
突き出す手刀から炎が噴出し、紅色の残像を引きずりながら宙を走った。拳ほどの炎は男の眼前に迫り、見事に命中……したかに思えた。炎は霧散し、立ち上る黒い煙が晴れると、呪文の刻まれた短刀をかざす男の笑みがイーリーの視界に飛び込む。
魔法は失敗だった。誰もが、そう思った。だが直後、消えたはずの炎が再び現れたのである。男の背後に小さな火の玉がひとつ、またひとつと浮かんできた。男も驚いたが、一番驚愕したのはイーリーである。彼は何もしていない。
その間にも火の玉は次々に浮かび、やがてひとつに集まると大きく旋回し、巨大な龍の姿に変貌して男を襲った。さすがの男の持つ短刀も役には立たず、男は老騎士から離れて地面に転がった。そして、明らかに分が悪いと悟ったのだろう。戦うのを諦め、イーリーを一瞥（いちべつ）すると木の葉を舞い上げて消え去ったのである。
すると炎の龍も標的を失って、岩壁に激突して消えた。その一瞬、イーリーは小さな笑い声を聞いた気がしたのである。空耳かと思ったが、その声はいつまでも耳に残っており、思い出すほどに鮮明になっていったのである。
「なんだったんだろう」
呟きながら、彼の脳裡にはひとつの名前が浮かんでいた。慌てて頭を振り、イーリーは近付いてきた老騎士に深く頭を下げ礼を述べる。そうしながら卒業試験のことを思い出し、気持ちを重くしていた。

第二章　一話

退屈な毎日だった。有り余るほどの時間は無為に流れ、ドス黒い想いはやがて、塵ほどの価値も見出せぬほどか細いものに変わっていく。愛と憎しみは表裏にあって、どちらかが失せればもう片方も意味を失う。それでもこだわるのは、ただ、意地だけだったのだろうか。

……ちがう。

自分を繋ぎ止める、ただの細い糸だ。正気を失わずにいるための、頼りない支えでしかない。深い闇は寂しく、孤独は切ない。涙も枯れ、想いも失せたとき、残されたのはただの言い訳と未練のみ。

彼女にはわかっていた。それでも、どこかに引っかかっているに過ぎない。喉の小骨の不快さのような、思い通りにならない歯がゆさばかりが身を焦がした。

時々外を眺めるが、代わり映えのない風景が季節の移り変わりと共に漂っているだけだ。誰かが訪れては、恐れるように去っていく。人が住み着くようになったのは、つい最近だ。それでも、楽しい相手ではなかった。

老人に、同種族の母と娘である。毎日は変わらず、退屈だった。だから新しい『おもちゃ』を見つけたとき、少しだけからかってみた。不思議なことに、驚きはしたようだが逃げ出さなかった。それどころか、荷物を抱えて再びやって来たのである。彼女にとってその行動は、とても新鮮だったのだ。

夜、そっと夢の中に侵入してみた。夢は、その人の柔らかい心を刺激する。最初は単純な好奇心だけで、罪悪感はいつも最後に訪れるのだ。だから彼女は夢から覚めたとき、とても後悔した。

目が覚めたとき、涙で滲んだ視界には赤銅色の天井があった。手

の甲で涙を拭いながら上半身を起こしたイーリー・シュレイガーは、見覚えのない場所にしばらく思考を巡らせた。幸い、この場所に関する記憶はすぐに見つかる。まだ昨日という新しい記憶は、彼の脳内で再生された。

ボルン・ディラックと名乗った老騎士は、イーリーが養成所の生徒であることを知ると、岩壁の鉄扉を示して言った。

「あそこにはアイソリュースの蔵書が保管されている。一部の写しは図書館にもあるが、その原本やここにしかない珍しい本があるそうだ。俺たちには関わりのないものだが、魔法を使う者には興味深いものばかりだと思う。プリムを助けてくれた礼に、中へ入る許可証を発行してあげよう」

最強の魔導師アイソリュースの蔵書があることは、多くの人が知っていた。そしておそらく封印の地として知られる公園にあることも、公然の秘密のように囁かれていた。だが、それは封じられ、誰も近づけない場所にあるのかとイーリーは思っていたのだ。

ところが入口が意外とわかりやすい場所にあり、人助けをしたからといって簡単に入れてしまう事実に驚いた。イーリーが率直に感想を言うと、ボルンは声を上げて笑った。

「俺がここの番人を任された時、大魔導師チャンドラー様より申し付かったことがある。それは、この場所が無闇に立ち入れる場所ではないが、だからといってすべての者を遠ざける場所でもないということだった。どういう意図でそう申されたのかは俺のような無学な者には理解出来ないが、俺自身の判断に委ねてくれたのだと理解することにした。つまり、俺が許可証を発行した者だけが立ち入れることにしたのだ。それに……」

ボルンは、プリムのきょとんとした顔に視線を向け、

「この部屋の主は今でも、アイソリュースであるということさ」

これまでも何人かが、この中に入ったことがあるらしい。しかし全員、一日もせずに帰って行ったのだという。それは番人も同じで、ボルンが任命されるまでにも数十人もの騎士が辞めていったそうだ。

「ここの本当の番人は、プリムの母親なのだ。今は病で床に伏しているが、彼女たちピーモ族だけが自由に出入りできる。俺の役目は、彼女たちを無慈悲な連中から守ることだ」

ピーモ族とは、小さく尖った耳を外見的特長として持つ、長命の種族だ。およそ人間の二倍以上は生きる。アイソリュースはこのピーモ族で、ピーモ族にとって彼女は英雄だった。しかしそのために、ピーモ族は迫害を受け、人間とは関わらずに生活をしていることが多い。しかしプリムたち母子は、この蔵書を管理するためにチャンドラーによって招かれ、ボルンがその保護を任されたということなのだろう。

「アイソリュースが心を許すのはピーモ族だけだが、人間に危害を加えるということはない。無理にとは言わないが、その気があるなら、中を覗いてみるか？」

イーリーはすぐに頷いた。興味もあるが、何より卒業レポートをどこで書くか迷っていたところだったからだ。アイソリュースに何をされるのかわからなかったが、少なくともレンツ・ファラディの陰湿さを上回ることはない気がした。

さっそく部屋に戻って簡単に荷物をまとめると、イーリーは岩壁をくり抜いて造られた書庫に足を踏み入れたのである。約束により、特別な用事以外の外出は禁止された。食事はお金を渡し、ボルンが用意してくれることになった。無闇に出入りすることで、人の目を集める事になるのを防ぐためだった。これもみな、心無い人からプリムたちを守るためだと教えられた。

書庫には、毎日一冊ずつ読んでも十年以上は掛かると思われるほど、膨大な本が高さ五メートルほどの本棚にびっしりと並べられていた。その本棚が四つ並び、部屋の奥に十メートルほども伸びている。本棚の手前、右手奥には燭台（しょくだい）の乗る年季の入った木製の机があった。

夜には闇に呑まれて見えなくなるほど高い天井には、等間隔でいびつな四角い窓が並び、木漏れ日のように明かりが差し込む。

イーリーはまず、どんな本があるのかを確認する作業で、最初の一日を費やし、夜を迎えた。そしてプリムが運んでくれた食事を本を読みながら済ませ、寝袋にもぐって眠ったのだ。
こうして昨日からの記憶の輪が結ばれ、イーリーは寝袋から這い出すと椅子に腰掛けて小さく頭を振る。跡が残っていないかと心配しながら目を拭い、ぼんやり部屋の中を眺めた。
嫌な夢を見た。忘れたかった。けれど忘れてはいけない夢。精神的な疲労が、彼を襲う。今何時だろうか……彼がそう頭の隅で考えた時、プリムが朝食を持ってやってきた。
「お兄ちゃん、おはよう」
小さな声で、あいさつをする。こちらの様子を伺うように、不安げな、しかしそれに勝る好奇心の光を宿した眼差しでイーリーを見た。
「おはよう、プリム。今は何時頃かな？」
少女はわずかに頭を傾げ、数回首を振ると「時計がないの」と答えた。
「困る？」
「ううん、大丈夫。それより、一緒にご飯を食べない？　一人じゃなんだかつまらなくて」
プリムは頷くと、自分の食事を取りに走って出て行った。その後ろ姿を見て、イーリーは笑みをこぼす。ピーモ族は悪魔を崇拝する邪悪の種族で王家を呪っている……などという噂が、今も囁かれたりする。けれどプリムを見る限り、それが本当に根も葉もない噂なのだということを、イーリーは実感した。
そして同時に、そうした噂の持つ恐ろしさを、改めて感じずにはいられなかったのだ。
噂はまるで伝染病のように広がって、姿の見えぬ幻影で人々の心を支配する。先入観を与え、疑心暗鬼に陥らせるのだった。そして時には、人の命をも奪ってしまう。
あの日の、イーリーの父親のように。

第二章　二話

イーリーの故郷は、一番近くの街まで行くにも歩いて半日かかるほど、深い山奥にあった。道も整備されておらず、馬車などの交通手段もない。しかしのどかで、時間がゆっくり流れるような雰囲気が、彼はとても好きだったのだ。

だが、土砂崩れの後に偶然発見された魔石の鉱脈によって、村は大きく変わってしまった。強力な魔法補助具として知られている魔石は、採掘される量が少ないことからとても珍重されている。そのため、ひとたび鉱脈を見つけたなら、莫大な富を築くことができるのだ。

村の男たちは皆、それまでの仕事を辞めて採掘作業に明け暮れ、魔石販売の最大手である『ギムナジム・カンパニー』と独占契約を結び、すべてが順風満帆かに思えた。しかしある日突然、採掘作業中に次々と村の男たちが倒れたのである。

激しい頭痛とめまい、中には吐血するものもいた。何か有毒ガスなどが発生しているのではと心配した村は、すぐにギムナジム社に調査を依頼したが、結果は、過労とストレスによる症状で採掘現場に原因はない、というものだった。だが、それにどうしても納得できなかったイーリーの父親は、独自に調査を開始し、魔石に関するある論文を発見したのである。

それは、魔石は破壊された時に多量の魔力を放出し、それを人体が繰り返し浴びると害をもたらす……というものだった。イーリーの父親はこれを証拠に村人を説得しようと試みたが、誰も耳を貸そうとはしなかった。実際に体調不良になった者たちも、しばらく休めば治ることからさほど深刻には考えていなかったのである。

それどころか、イーリーの父親が村から採掘される魔石は粗悪品だと、街に行って言いふらしているという噂まで流れたのだ。

これに対しギムナジム社は契約の打ち切りを匂わせ、それに慌て

た数人の村人がイーリーの父親を私刑にしたのである。どんなに採掘しても、それを加工して販売するには専門の会社との協力が必要不可欠なのだ。もしギムナジム社と契約を打ち切ったら、おそらくどの会社も見向きもしないだろう。一度目の当たりにした巨額の富を、村人たちは失いたくはなかったのだ。

イーリーが見た最後の父親は、その面影すらないほど腫れた顔と、血にまみれた姿だった。

憂鬱(ゆううつ)そうに息を吐いたイーリーは、暗い気分を振り払うように頭を振る。昨晩、久しぶりに父親の夢を見たせいで、蘇る光景はやけに鮮明だったのだ。

忘れることは出来ないが、向き合うにはもう少し時間が必要な思い出だった。

イーリーは気持ちを切り替え、暗い影が面に出ないよう努める。プリムたちに心配をかけたくなかった。しばらくして少女が朝食を持って戻って来たときは、いつもの彼に戻っていた。

朝食のひと時は、嫌なことを忘れさせてくれるほど穏やかだった。イーリーが一方的に話すだけだが、プリムが関心を持ってくれているのが分かり、彼も思わず饒舌(じょうぜつ)になる。時々、クスクス笑う少女の笑顔に和んだ。

少女も、少しだけ自分のことを話してくれた。

プリムの母リアナは、ここに訪れてから彼女を生んだのだという。来た時はすでに妊娠しており、父親が誰なのかはリアナしか知らない。リアナは今、おそらく風邪だろうと診断され臥(ふ)せっているが、起き上がれないほどではないらしい。ただ、ボルン以外に対しては未だ人間に不信感を抱いているため、イーリーの前には姿を見せないのだという。

プリムはそのことを気に病んでいる様子だったが、イーリーは少しだけリアナの気持ちが分かる気がした。自分もまだ、故郷の村人

と会うことは出来ないだろう。
　こうしてそれぞれお互いのことを何となく話していると、わずかながらプリムが打ち解けてきているようにイーリーは感じた。だからだろうか、食事を終えて帰ろうとする少女は、利発さを覗かせる笑顔を浮かべて彼に言った。
「アイサ様はきっと、一人きりで寂しくしていると思うの。会うことがあったら、お話の相手をしてあげて」
「えっ？」
　驚いたイーリーが何か質問をする前に、プリムは出て行ってしまった。
「アイサ様？　会うことがあったら？」
　不吉なものを感じ、イーリーは少し震えた。

　昼食のサンドイッチを頬張りながら、イーリーはレポートに向かっていた。最初は古代から近世への魔法の変遷について書く予定だったが、少し変更して魔法とピーモ族の関わりを中心にした。プリムに会ったことがきっかけだったが、魔法について深く知るためにはピーモ族との関わりを無視することは出来ないと思ったのである。
　そもそも魔法は、ピーモ族が最初に使い始めたと言われている。しかし養成所で教える魔法の始まりは、初代国王ゼーマン・ハイデルまでだ。それ以前の歴史には、ほとんど触れることはなかった。なぜなら、二千年以上も昔は闇の眷属に支配された混沌の時代であり、当時を知る文献の類もほとんどなかったためである。
　ところが、イーリーはこの書庫に来ていくつか興味深いものを発見した。これまであまり知られることのなかった……少なくとも養成所では教えることのない魔法の起源と歴史について、詳細に書かれた本をいくつか見つけたのである。その一冊が『治癒源法』というものだった。
　偶然手にしたその本には、生命が持つ治癒力を高めるための方法

として、祈祷から起こる魔法形態が記されており、その一つに、【魔法陣】というものがあった。【魔法陣】が魔法という技術の最高峰であり、それを簡略化したものが現在でも使われる魔法なのだという。

「――外部からの総合的な治癒効果を、より個体の病状にあった形で柔軟な対処を行うために生み出されたのが、魔法であり薬学である。それらを総じて魔術と呼び、薬草と魔力による細胞刺激によって治癒力を高め……そうか、魔法とは本来、魔力を使った医学の一種だったんだ。でも、それがどうして今のような元素界との契約になったんだろう」

イーリーはすぐに別の本を探すため、本棚の間を歩き回った。初日に、何の本があるのか一応まとめたものがあり、その中からよくわからなかったものを中心に調べることにした。

「あの辺かな」

梯子を持って来て、イーリーは棚の上の方にある本を物色する。

「これは……何語だろう？」

二十冊ほど、見たことのない言語で書かれた本が並んでいた。中を見るが、やはりまったく読むことが出来ない。ただ、描かれた図からその本がどうやら【魔法陣】の本だということは察しがつく。

「養成所では、【魔法陣】を魔力を持たない昔の人が用いた原始的な方法で、一種の祈祷・まじないの類だと教えられたけど、さっきの本には魔法の最高峰って書かれてた。これが読めれば、何かわかるかも知れないのに……」

とりあえずイーリーは、この何語かわからない本を下に降ろそうと、何冊か脇に抱えた。と、視界の端で何かが動いたような気がして、そちらの方向を見る。

「ネズミかな？」

常識的にそう思ったイーリーだったが、再び何かが横切り、突然、停止した。その姿はネズミよりも大きい、人の姿をしていたのである。

「こんにちわ」
「うわあ！」
驚いたイーリーは梯子から転げ落ち、後に続いた本に潰された。
「大丈夫～？」
顔を上げたイーリーの前に、半透明の女性が降り立つ。髪の長い、スリットの入ったタイトスカートの、美しい女性だ。
（だ、誰？）
戸惑うイーリーはその時、ふとプリムの言葉を思い出した。
（まさか、アイサ様？　えっ？）
その瞬間、彼女こそが『アイサ様』であり、この書庫の主である魔女アイソリュースなのだと、イーリーは直感した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9599x/

夢の彼方の魔法陣

2011年11月5日03時10分発行